

カンボジアプロジェクト2026 「ありがとうの花をさかせよう」を開催しました。



2026年8月8日(土)から12日(水)、チーム「アジアの風」は、カンボジア・プノンペンの「ひろしまハウス」を訪問し、「カンボジアプロジェクト2026」を実施しました。今回のテーマは、「ありがとうの花をさかせよう」子ども達と一緒に紙版画による造形活動に取り組みました。身近な素材を使って版をつくり、ローラーでインクをのせ、紙に刷る。版をめくった瞬間に現れる思いがけない形や色に、子ども達の笑顔が広がりました。

活動の最終日には、日本文化を楽しんでもらう「日本の祭」を開催。輪投げ、シューティング、空き缶倒し、スーパーボールすくいなどを行いました。今回は、日本側のメンバーがすべてを「してあげる」のではなく、子ども達自身が役割をもち、現地の先生方と一緒に活動をつくることを大切にしました。

私たちが目指しているのは、一度きりの支援ではありません。子ども達が自ら考え、行動し、学ぶこと。現地の先生方や地域の人々と共に、その学びが未来へつながっていくこと。「ありがとう」という言葉から始まった小さな花が、人と人、カンボジアと日本をつなぎ、これからも大きく育っていくことを願っています。



PROJECT MEMBER'S VOICE—カンボジアでの出会いと学び—

澤田 晃一〔愛知県立ひいらぎ特別支援学校 教諭〕



今回、「アジアの風」の一員として、初めてカンボジアを訪れました。現地のタクシー運転手から、経済格差や教育機会の不平等について話を聞き、トゥールスレン虐殺博物館を訪れたことで、悲しい歴史からの復興の途上にあるこの国の現状を実感しました。

国際協力について考える中で、より良い援助を考えることは、より良い教育を考えることでもあると気づきました。何を支援し、何をあえてしないのか。自立のために本当に必要なものは何か。これらは、普段、特別支援学校で子ども達と向き合う自分自身の仕事にも通じる問いでした。

今回、日本の祭りをテーマにした活動では、子ども達にも運営する側として参加してもらいました。任された役割に責任をもち、友達同士で協力しながら活動を盛り上げ、進んで引き継ぎを行う姿が印象的でした。一方的に与えるのではなく、子ども達自身が主体的に学べる環境をつくることの大切さを実感しました。

今後も、ひろしまハウスの職員の方々と子ども達の成長についてともに考えていきたいと思えます。特別支援学校での経験を国際協力に生かし、現地で得た学びを日本の生徒達に還元する。そうした学びの循環をつくることこそ、教員としての自分の役割だと感じています。

奥田 章子〔愛知県立名古屋特別支援学校 教諭〕

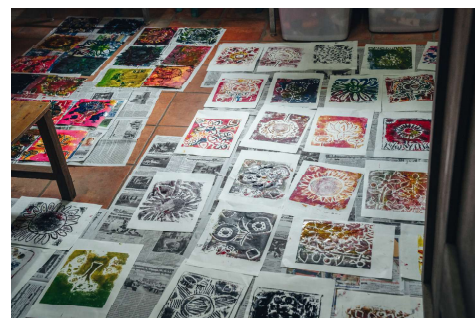


今回は、約18年ぶり、人生で2回目のカンボジア訪問でした。大学生だった前回とは印象が全く異なり、今回は帰りたくないほど、この国や出会った人達に強く惹かれました。

ジェムリアップでは、元教師

のタクシードライバー、ブラさんとの出会いを通して、カンボジアの現状や未来への思いに触れることができました。また、発展の進むプノンペン街並みにも驚かされました。

活動拠点のひろしまハウスでは、教育熱心な先生方や勉強にも遊びにも一生懸命な子ども達と出会いました。友達と協力し、自分で考えて行動する姿は頼もしく、異なる年齢の子ども達が関わり合い、ともに成長できる環境の素晴らしさを感じました。



一方、トゥールスレン虐殺博物館では、過去の悲惨な歴史に強い衝撃を受けました。生存者の方の姿を目にしたとき、涙が止まらず、その存在そのものが希望だと感じました。街に戻り、人々の笑顔や日常の営みに触れ、平和の尊さを改めて実感しました。

ひろしまハウスは、カンボジアの平和の象徴のように感じます。子ども達が笑顔で学び、遊ぶ日常が、これからも続いてほしいと心から願います。

「子ども達には、自分で行動したことを信じてほしい」。ブラさんのこの言葉が、今も心に残っています。たくましく成長していく子ども達を、これからも見守っていきます。

あとがき

自称シャイで真面目な私が、初対面の人達と歌い、踊り、ハグするなんて！ すっかりカンボジアマジックにかけられました。温かい仲間達とカンボジアに感謝です。オープン！

神山 悟〔理学療法士〕



今回で2回目となるカンボジアでのボランティア活動を通して、貧富の格差や複雑な歴史的背景によって、子ども達が十分

な教育を受けられない現状を改めて痛感しました。しかし、厳しい環境の中でも、目を輝かせて授業や活動に取り組む子ども達の姿は、とても力強く映りました。特に印象的だったのは、完成した作品をうれしそうに見せてくれる子ども達の無邪気で純粋な笑顔です。私達の言葉や反応の一つひとつが、子ども達の自己肯定感を育み、未来を切り開ききっかけになると感じ、対話や関わり方を大切にしました。

一方で、支援を一時的な活動で終わらせず、「持続可能な教育」につなげることの重要性も感じました。今回は、現地の先生方に活動の進め方を見ていただき、実際に運営の一部を担っていただくなど、現地主体の活動を意識しました。

外部からの支援に頼り続けるのではなく、現地の先生方や地域社会が中心となって子ども達を育てていく仕組みが必要です。今回得たかけがえのない学びや子ども達とのつながりを糧に、持続可能な未来に向けた関わり方を今後も模索していきたいと思えます。

